

やりたいことをフルスイングで 失敗のたびに学びがある



IUI情報経営イノベーション専門職大学
学長 中村伊知哉氏

在学中に一度は起業するの必須の課題——
IUI情報経営イノベーション専門職大学は、世界で初めて「イノベーション」を冠した個性溢れる存在だ。大学時代にバンクバドのプロフェッサーを務め、キャリア官僚を経て、アカデミアなどで活躍する中村伊知哉氏を中心となり2020年に開学した。学長として「今ボクが高校生だったら行きたい大学を、みんな始めて始めてみました」とメッセージを送る中村氏に、自身が描く大学のあり方を聞いた。

かを作ることができるハブの機能を大切にしています。ちなみに、IUIは学生も教員もスタッフもフラットなコミュニケーションで、学生は教員に対して「先生」と呼んではいけないことになっていて、私も「伊知哉さんです」。

「全員がメデアにならましよう」

1期生が22年4月より3年生になります。IUIでは最初の2年で起業に必要なことを徹底的に勉強し、3年で全員半年間、民間企業でのインターンを経験し、その後3年間は卒業する流れが基本です。ところが、4年も待てないと考える学生がほぼつばと出始めていて、既に7社が起業しています。

IUIのカリキュラムはシンプルで、「ICT力」「ビジネス力」「グローバルコミュニケーション力」の三本柱で成り立っています。その3つが、イノベーションを生み出す基礎的な力になると考えているからです。

デジタルネイティブな今の学生は、私の世代より高いICTのリテラシーを持っています。ただICTはいわば道具。使わなければ意味がない。しかも情報を集めて分析するだけでは不十分で自ら発信する力が重要です。学生には「全員が

メデアにならましよう」と話しています。

プログラミングの授業が小学校から必修になると、年代が上がるほどデジタルの達人が増え、はややしている下世代から抜かされてしまう。そんな危機意識を持つ学生もいるでしょう。しかも、ICTの力だけで起業するのは容易ではありません。ビジネスの世界ではそれ以前に「ちゃんと挨拶しよう」「期限を守ろう」といったルールが大事にされます。暗黙知であるビジネス力を、それぞれの世界の第二線の教員から直に学べることは、イノベーションを起こす上で大きな武器となるはずですよ。

英語を中心としたグローバルコミュニケーションは、日本という縮小していく市場を考えれば実践しにくいといえよ、むしろ学生の方が考えているようです。私への



その道の手本となる教員がたくさんいる大学

英語での起業のプレゼンテーションも、びつくりするくらい高いレベルです。英語を使わざるを得ない環境に飛び込んで、まずは塾生を上げてでも何とかするものです。既に海外の大学とも13校で提携しており、各校にサテライト機能を持つことで、交友を国際化させたいとコロナ後を見据えています。

失敗は社会に出たら 大きな糧になる

私自身の進路を振り返れば、高校生の頃は何も思わずにただ受験勉強が嫌でした。日本でいちばん楽に過ごせるという理由だけで入学した大学は結局、1回も授業に出席していません。好きなバンドや映画、映画に明け暮れ、音楽で飯を食うことを夢見ていましたが、周りにはすごい奴らがいっぱいて、これは叶わないと挫折しました。自分が才能ある誰かを応援する側に回った際、仲間みやルールから関わる立場になりたいと、当時、情報通信部門を担っていた郵政省を目指しました。社会人の1年目に大卒時代をはるかに上回る勉強をしたのを見ています。それが自分のスタート地点。

本当はもっと早くに必要な勉強が分かっていたら、もっと違う

に来てくださっています。例えば、吉本興業の会長が月に1回、起業支援について講義をしています。自分の進路の手本となる方が周りにいて、身近に接することができる。私が学生の頃には考えられない環境です。

イノベーションは改革や革新と捉えられることが多いのですが、全員が全員「ビル・ゲイツやスティーブ・ジョブズ、孫正義」といったイノベーターになる必要があるわけではありません。むしろ、少子高齢化の日本ではシャッター商店街や独居老人、食品廃棄など身近な社会課題が山積していて、どうすれば持続的に解決できるかが求められています。おそらく今後は、起業の目的のメインになっていくのではないのでしょうか。

起業してやりたいことがあった時に、ヒントを求められる教員が身近にいる。マーケティングやテクノロジー、法律など、そこで勉強すべきことを知ることができる。必要なことから自発的に学ぶ。いろんな人を巻き込みながら勉強するのは本人にとっても一番効果的。教材やコンテンツはネットを含め世界中に溢れています。ただそれだけでは分からないものがある。集まって話して聞いて、何かを始めて何

道が開けていたかもしれないという思いが今につながっています。学生運動や演劇、音楽と世代に応じて社会への思いを表現する場は変わっています。今はデジタル回りが多いでしょう。でも、学生たちが自分の問題意識として社会を動かす際、本当に大暴れできているのか。やりたいことをフルスイングで自由にできる場所として、IUIが機能してほしいと思っています。

学生時代は何度でもしくじりなさいと学生には話しています。起業のほとんどは失敗に終わるでしょう。でも失敗から学ぶことは多く、社会に出てから大きな糧になる。素業も成功を取った教員ほど、失敗の経験を力説しているのを見て

中村伊知哉 (なかむら いちや)氏

1961年生まれ。京都大学経済学部卒、大阪大学博士課程単位取得退学。博士(政経)メデア。1984年、ロックバンド「少年ナイフ」のディレクターを経て郵政省入省。MITメデアラボ客員教授、スタンフォード日本センター研究所所長、慶應義塾大学教授を経て、2020年4月よりIUI情報経営イノベーション専門職大学学長。

産業界と一緒になって ベンチャーを起す

グループもフェイスブックも米国の大学から誕生しましたが、日本ではウォークマンやファミコンしか、初音ミク、たまごっちと世界的に流行ったもので大学が生んだものはありません。産業界と一緒にベンチャーを起さず流れて日本の大学にはな。だつたら率先してそんな大学を作ればいいと思ったのが、IUIの誕生のきっかけです。

高度経済成長期の成功体験を引きずったまま制度不良を起している日本は、経済力でどんどん外国に抜かれ、先が見通しにくい状況ですが、私はこの国のモノを作る力にはとても大きなものがあると思っています。そういう人材を養成する場があるべきだと考えています。

どうやら、同じようなことを考えているのは私だけではなく、多くの産業界の方から賛同をいただきました。大学でイノベーションを起すのに学問の分野の人だけで着るのは無理な話です。みんなで作る大学がモットーで30名の教員の8割方は産業界の出身です。一緒にプロジェクトを起そうと連携している企業は約300社を超え、プロ500名が各員教員としてIUI